

論点整理ペーパー及び農薬専門調査会体制

(平成 28 年 4 月農薬専門調査会決定)

	頁
(食品健康影響評価を実施する部会を指定する農薬)	
クロルメコート.....	1
農薬専門調査会体制（平成 28 年 4 月農薬専門調査会決定）	2
【参考】	
(部会で ADI 等が決定し幹事会へ報告する農薬)	
テフルベンズロン	3

クロルメコート

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	評価資料
・ 暫定基準の見直し ・ 適用拡大	—	ジベレリンの生合成阻害	植物成長調整剤	・ 農薬抄録 ・ 海外評価書（JMPR）

【試験成績の概要】

1. ラットを用いた動物体内運命試験の結果、経口投与されたクロルメコートの吸収率は、投与後 48 時間で少なくとも 75.4%と算出された。投与放射能の 90%TAR 以上が尿及び糞中に排泄され、主に尿中に排泄された。尿及び糞中の主要成分は未変化のクロルメコートで、代謝物として B、C、E、F、G 及び J が認められた。
2. 植物体内運命試験の結果、主要成分として未変化のクロルメコートが認められたほか、代謝物 B、E、G 及び J が 10%TRR を超えて認められた。
3. 各種毒性試験結果から、クロルメコート投与による影響は、主に体重（増加抑制）に認められた。発がん性、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった。
4. ラットを用いた繁殖試験において、受精率及び受胎率低下並びに出生児数減少が認められた。

【評価を受ける部会（予定）】：評価第三部会

農薬専門調査会体制(平成28年4月農薬専門調査会決定)

幹事会

農薬専門調査会座長及び座長代理、各部会座長、農薬専門調査会座長が指名した者

審議結果を幹事会に報告

幹事会

西川 秋佳《座長》	清家 伸康
納屋 聖人《座長代理》	※永田 清
※赤池 昭紀	中島 美紀
浅野 哲	長野 嘉介
※上路 雅子	林 真
小野 敦	本間 正充
三枝 順三	※松本 清司
代田 眞理子	與語 靖洋

評価第一部会

○小澤 正吾
(岩手医科大教授・動物代謝)
○平塚 明《座長代理》
(東京薬科大教授・動物代謝)
○清家 伸康
(農研機構ユニット長・植物代謝)
○本多 一郎
(前橋工科大教授・植物代謝)
○相磯 成敏
(バイオアッセイ研部長・毒性)
※赤池 昭紀
(京大名誉教授・毒性)
○浅野 哲《座長》
(国際医療福祉大教授・毒性)
○佐藤 洋
(岩手大教授・毒性)
○豊田 武士
(国衛研室長・毒性)
○平林 容子
(国衛研部長・毒性)
※藤本 成明
(広島大准教授・毒性)
○桑形 麻樹子
(秦野研室長・生殖)
○堀本 政夫《座長代理》
(千葉科学大教授・生殖)
○山本 雅子
(麻布大名誉教授・生殖)
○林 真
(安評センター名誉理事長・遺伝毒性)
○森田 健
(国衛研室長・遺伝毒性)
○若栗 忍
(秦野研研究員補・遺伝毒性)

評価第二部会

○杉原 数美
(広島国際大教授・動物代謝)
○中島 美紀
(金沢大教授・動物代謝)
※永田 清
(東北医科薬科大教授・動物代謝)
○腰岡 政二
(日本大教授・植物代謝)
○中山 真義
(農研機構研究領域長・植物代謝)
○小野 敦《座長代理》
(岡山大教授・毒性)
○三枝 順三《座長》
(日本実験動物学会事務局長・毒性)
○高木 篤也
(国衛研室長・毒性)
※松本 清司
(信州大特任教授・毒性)
○美谷島 克宏
(東京農業大准教授・毒性)
○義澤 克彦
(武庫川女子大教授・毒性)
○中島 裕司
(大阪市立大教授・生殖)
○納屋 聖人《座長代理》
(産総研客員研究員・生殖)
○八田 稔久
(金沢医科大教授・生殖)
○福井 義浩
(名古屋学芸大教授・生殖)
○根岸 友恵
(日本薬科大非常勤講師・遺伝毒性)
○本間 正充
(国衛研部長・遺伝毒性)

評価第三部会

○加藤 美紀
(名城大准教授・動物代謝)
○篠原 厚子
(清泉女子大教授・動物代謝)
※玉井 郁巳
(金沢大教授・動物代謝)
○與語 靖洋《座長代理》
(農研機構研究領域長・植物代謝)
○吉田 充
(日本獣医生命科学大教授・植物代謝)
○川口 博明
(鹿児島大特任准教授・毒性)
○久野 壽也
(豊川市民病院病理診断科部長・毒性)
○高橋 祐次
(国衛研室長・毒性)
○長野 嘉介《座長代理》
(長野毒性病理コンサルティング代表・毒性)
○西川 秋佳《座長》
(国衛研研究センター長・毒性)
※山手 丈至
(大阪府立大教授・毒性)
○代田 眞理子
(麻布大教授・生殖)
○塚原 伸治
(埼玉大准教授・生殖)
○中塚 敏夫
(名産研中部TLOアドバイザー・生殖)
○石井 雄二
(国衛研主任研究官・遺伝毒性)
○太田 敏博
(東京薬科大教授・遺伝毒性)
○増村 健一
(国衛研室長・遺伝毒性)

※:専門参考人

テフルベンズロン（第 2 版）

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	評価資料
・適用拡大	ベンゾイルフェニルウレア系	キチン質合成阻害作用	殺虫剤	・農薬抄録 ・作物残留試験成績（きく（葉）） ・海外評価書（米国、JMPR、EU、EFSA、EMA）

【試験成績の概要】

1. ^{14}C で標識したテフルベンズロンのラットを用いた動物体内運命試験の結果、経口投与されたテフルベンズロンの吸収率は尿及び胆汁中排泄率から 6.3%～23.0% と算出された。血漿中における $T_{\max}$ は 0.67～24 時間であり、その後血中濃度は速やかに減少し、いずれの投与群においても、投与後 2 日以内に 90%TAR 以上が尿及び糞中に排泄され、主に糞中に排泄された。糞中放射能の主成分はテフルベンズロンであった。
2. ^{14}C で標識したテフルベンズロンの植物体内運命試験の結果、いずれの植物においても残留放射能の主要成分はテフルベンズロンであり、代謝物はだいた処理葉で G が同定されたが、G を含め 10%TRR を超える代謝物は認められなかった。
3. テフルベンズロン及び代謝物 G を分析対象化合物として作物残留試験が実施された。テフルベンズロン及び代謝物 G の最大残留値は、それぞれ茶（荒茶）の 13.1 mg/kg 及びえだまめの 0.005 mg/kg であった。
4. 各種毒性試験結果から、テフルベンズロン投与による影響は主に肝臓（肝細胞肥大、肝単細胞壊死、変異肝細胞巣等）に認められた。繁殖能に対する影響、催奇形性及び遺伝毒性は認められなかった。
5. マウスを用いた発がん性試験において、雄で肝細胞腺腫の発生頻度増加が認められたが、メカニズム試験の結果から、腫瘍の発生機序は遺伝毒性によるものとは考え難く、評価に当たり閾値を設定することは可能であると考えられた。